

和俗童子訓卷之四

○手習法

書は心畫なり揚子公の言に、言は心聲也書は心畫也聲畫形はれ君子小人見る柳公權一唐の華原の人博く經術に通ず、稷宗嘗て筆法を問ふや對ふ

一古人書は心畫なりと云へり。心畫とは、心中にある事を外に書き出す繪なり。故に手跡の邪正にて、心の邪正顯る。筆跡にて心の内も見ゆれば、慎みて正しくすべし。むかし柳公權も、心正しければ筆正しと云へり。凡書は、言をうつつして言語にかへ用ひ、行事を示して當世に施し、後代に傳ふる證迹なり。正しからずんばあるべからず。故に書の本意は、唯平正にして讀み易きを宗とす。是第一に心を用ふべき事なり。あながちに巧にして、筆跡のうるはしく見所あるを宗とせず。もし正しからずして讀み難く、世用に通ぜずんば、巧なりといへども用なし。然れども又いやしく拙きは、用にかなはず。

一凡字を書習ふには、眞草共に、まづ手本を擇び、風體を正しく定むべし。風體惡し



らく心正しければ則ち筆正しと、本文にいへるは即ち是也
中華—支那をいふ、もと支那人自ら稱せし誇言也、原本或はチウクワと讀み或はカラと訓じ前後一定せず

三筆三跡—三筆は嵯峨天皇、橘逸勢、僧空海にして、三跡は小野道風、藤原佐理、藤原行成也
家流—御家流也、尊圓法親王の始めたる一派にして一に青蓮流ともいふ

くば、筆跡よしといへども、習はしむべからず。初學より、必風體すなほに、筆法正しき、古の能書の手跡を擇んで、手本とすべし。惡筆と惡しき風體を習ひ、一度惡しきくせつきては、一生なほならず。後能書を習ひても改まらず。日本人のよき手跡を習ひ、世間通用に達せば、中華の書を學ばしむべし。然らざれば手跡進まず。唐筆を習ふには、まづ草訣百韻、王羲之十七帖、王獻之鵝群帖、淳化法帖、王寵が千字文、黃底經などを習はしむべし。また懷素が自敘帖、米元章が天馬賦などを學べば、筆力自由にはたらきてよし。

一和流唐流、共に古代の能書の上筆を求めて習ふべし。今時の俗筆をば習ふべからず。手本惡しければ、生れつきたる器用ありて、日々勤め學びても、見習ふべき法なくして、手跡進まず。器用もつとめも空しくなりて、一生惡筆にて終る。我が國の人、近世手跡拙きは、手習の法を知らざると、古代のよき手本を習はざる故なり。一本朝にも、古代は能書多し。皆唐筆を學べり。唐人も、日本人の手跡をほめたり。中世以後、唐の筆法を失へり。故に能書少なし。あれども上代に及ばず。近代は彌俗流になりし故、時を逐ひて拙くなる。凡文字は中華より出で、眞行草も唐より始まる。

日本流とて別に有るべからず。唐流の筆法に違へるは俗筆なり。同じくは、唐の正流を初より習ふべし。但近世の正しからざる唐筆を習へば、手跡ひがみ邪にして、讀み難し。文盲なる人は、唐流は讀み難しと云ふ。それは惡しき風を習ひたるを見て言へり。からの書は、眞字をまづ習ひて、それに隨ひて、行草を書く故に、筆跡正し。日本流は、眞字に隨はず、字形をかざる故、多くは字畫ちがひ、無理なること多し。一眞字は、殊に唐筆の正しき能書を初より學ぶべし。和字も古の能書をはじめより學ぶべし。和字には中華流あるべからず。眞字には和流あるべからず。和流に眞を書くこと、唐流に和字をかくとは、皆ひが事なり。此理を知らずして、今時唐流にかなを書く人あり。然るべからず。草書には、和流もあれども、唐流に本づかざる俗流なり。正流にあらず。本朝上代の能書、三筆三跡など、皆唐流に本づけり。其後世尊寺、清水谷など能書の流を家流と云ふ。是また中華の筆法あるは、俗流にあらず。俗流をば學ぶべからず。誠の筆法なし。近代の和流の内、尊圓親王の眞跡は、唐の筆法あり、よのつねの俗流にまされり。眞跡にあらざるは、唐の筆法なし。習ふべからず。眞跡稀なり。其外、古の筆法を知らず、器用に任せて書きたる名筆、近世多し。



世俗は賞翫すれども、古法を知らざるは、皆俗筆なり、學ぶべからず。
 一 小兒初て手習するには、先一二三四五六七八九十百千萬億、次に天地、父母、五倫、五常、四端、七情、四民、陰陽、五行、四時、四方、五穀、五味、五色などの名目の手本を、眞字に書きて、大に書習はしむべし。

てには一
 にをほの略
 にて助字の
 事をいふ、
 後に詳説あり、
 三八九
 頁本文参照

一 あいうえお五十字は、和音に通ずるに益あり。横縦に讀覺ゆべし。かな遣てにはなども、是を以て知るべし。いろはの益なきにまされり。國字も皆是に備れり。片假名はおそく教へ知らしむべし。

一 凡文字を書習ふに、高く墨を取り、端正にすりて、すり口をゆがむべからず、手かけがす事勿れ。高く筆を取り、雙鉤し、端正に字を書くべし。雙鉤とは筆の取りやうなり。凡字を書くに、一筆一畫平正分明にして、老草に書くべからず。老草とは、平正ならず、わがまくに疎忽に書くをいふ。手本を能く見て、違はざるやうに、しづかに學ぶべし。才に任せ達者ぶりして、老草に書けば、手跡あがらず。書を寫し習ふにも、平正に書くべし。常の書札など書くにも、手習と思ひて、慎みて正しく書くべし。斯の如くすれば、手跡進み易し。手を習ふには、まづ筆の取りやうを知るべし。

一 雙鉤とは筆の持ちやうなり。大指と食指中指の二指と對してはさむを云ふ。食指一をかけてはさむをば單鉤と云ふ。單鉤は手かたまらずして、筆に力なし。故に雙鉤をよしとす。日本流は多く單鉤を用ふ。

一 雙鉤の法は、まづ筆を大指と食指にてはさむに、大指のはらと食指の中節のわきに、筆をあらしむべし。此二指は力を主とる。次に中指をかめて、筆を指のとがりに附け、筆をおさへ、次に無名指の外、爪と肉とのきはに筆をあて、上におさへあけて、中指と相對してはさしはさみ、中指は外より内におさへ、無名指は内より外へおす。此二指は運動を主とる。大指と食指にて、上にて挟みたる筆を、また中指と無名指を以て、下にて挟み、堅固にするなり。次に子指は無名指の下かどにつらねて、無名指の力を助く。筆の左に行き右に行く時、無名指をたすけて導き送る。筆を取る事、五指ともに淺きをよしとす。淺ければ力強くして、はたらき自由なり。

一 虛圓正緊は、筆を取る四法なり。知らずんばあるべからず。虚とは、指を掌に近づけずして、掌の内を虚しくひろくするを云ふ。鏡の形の如くなるをよしとす。圓とは、掌の外、手の甲を圓くして、
 〽てなきを云ふ。虚圓の二は掌の形なり。正と

は、筆をすぐにして、前後左右にかたよらざるを云ふ。斯の如くならざれば、筆鋒あらはれ、横あたりあり。緊とは、筆をきびしく堅く取りて、やはらかならざるを云ふ。上より抜き取られざるやうに執りてよし。斯の如くならざれば、筆に力なくして弱し。正緊の二は筆の形なり。此四法は、筆を執るならひなり。日本流の筆の執りやうは、是に異なり、單鈎に取りて筆鋒を先へ出し、やはらかにして、上より抜き取るをよしとす。

一 小児の時より、大字を多く書習へば、手くつろぎはたらきてよし。小字を書きて、大字を書かざれば手すくみてはたらかず。字を習ふに、紙を惜まず、大に書くべし。大に書習へば、手はたらきて自由になり、又年長じて後、大字を書くに善し。もし小字のみを書習へば、手腕すくみて、長じて後、大字を書く事なり難し。手習ふには、悪しき筆にて書くべし。後に筆をえらばずして善し。もしよき筆にて書習へば、後悪しき筆にて書く時、筆跡悪し。時々よき紙に書くべし。悪しき紙にのみ書習へば、よき紙に書く時、手すくみてはたらかず。

一 眞字を書く法、大なる字はつめて小ならしめ、小字はのべて大ならしめ、短字は長

くつろぎ
緩かにのび
のびせるを
いふ、すく
みの反對也

横に二字一
扁と旁とよ
り成れる文
字を云ふ
上下二字一
冠を加へて
成れる文字
をいふ

入木一墨の
木にしみ込
む意にて筆

く、長字は短くすべし。横の筆畫は細きがよし。豎の筆畫はあらかきがよし。横に二字合せて一とする字は、ひろくすべからず。上下二字合せて一とする字は、長くすべからず。疎は密に、密は疎なるべし。骨多きに宜し、肉多きに宜しからず。皆是筆法の習ひなり。

一指を以て筆を動かす事勿れ。大字は肘をうごかし、小字は腕をうごかす。筆のはたらき自由なるべし。指は執る事を主どり、肘腕は動くことを主どる。指はうごかすべからず。

一 筆の執りやうは正しくして、筆の横にあたらざるやうに、筆鋒を正しく直にすべし。筆直に正しければ、筆鋒あらはれずしてよし。筆傾けば鋒あらはる。筆鋒の當る所を、あらはれざるやうに藏すべし。左の筆を起す所、殊にあらはれざるがよし。鳥の口嘴の如くとがれるは悪し。又右のかどに肩をあらはすべからず。鋒は常に畫中にあらしむべし。これを藏鋒と云ふ。藏鋒をよしとす。

一 筆鋒は紙に強く當るべし。入木といふも此事なり。

一 手を習ふに、筆のはたらきの神彩を先とし、字の形を次とす。字の形よくとも、神彩



力の強きをいひ轉じては單に習字の義にもいふ、書斷に王羲之晉帝の時北郊を祭るに祝版を更む工人之を削るに筆木に入ること三分とあるより出でたる語也眞一行二草三指の筆毫を距ること眞は一寸行は二寸草は三寸なるべしとの義

内閣字府一内閣祕傳字府の略、三卷あり、黄登、黄鉞の合著に係り古來の書論及び書法を纂録す眞は行を生じ云々此語東坡の志林に見ゆ

なければよしとせず。一初は一流を專習ふべし。後には諸流のよきを取りて則とすべし。もはら一流を似すべからず。古人の一流に全く似たるをば、書奴と云ひていやしむ。一筆ひたし過すべからず、又乾かすべからず。硯は時々あらひ、新水をかへ用ひ、ほこりを去るべし。墨をばやはらかにすり、筆をば強く執るべし。故に墨は病夫にすらせ、筆は壯夫に執らしむといふ。和流は是に異なり、筆をやはらかに執るなり。一手習の後は、物を書くに硯池の水を染めず。新水を墨する所に入れて、墨をすり、時に臨みて染むべし。

一筆に墨を染むる事、大字を書くにも、三分に過ぐべからず。深くひたすは、筆よわくして力なし。細字は猶もみじかく染むべし。一筆を執るに、眞書は軸を低く、草は高く取る。行は其間なり。眞一行二草三といふ。一腕法三あり。枕腕あり、提腕あり、懸腕あり。枕腕は左の手を右の手の下に枕にさするなり。是小字を書く法なり。提腕は肘は机につけて、腕をあげて書くなり。是中字を書く法なり。懸腕は腕をあげて空中に書くなり。是大字を書く法なり。腕を下につ

くればはたらかず。是小字中字大字を書く三法なり。

一字を學ぶには、必まづ眞書を大文字に書習ふべし。内閣字府の七十二筆を先うつすべし。次に行書を書習ふべし。凡字を書習ふには、眞行草共に古人の能書を法とすべし。東坡が曰、眞は行を生じ、行は草を生ず。眞は人の立つが如く、行は人の行くが如く、草は人の走るが如し。いまだ不立して、能く行き能く走る者はあらじと云へり。是を以て見るに、眞は本なり、草は末なり。唐土には、まづ眞書より學ばしむる故に、字畫正しく誤なし。倭俗は眞字を學ばざる故に、文字を知らず、字畫に誤多し。眞書を學ばざれば、草書にも誤多し。本邦近代の先輩、さばかり能書の名を得たる人多けれど、眞書を不學ゆる、其筆跡、眞草共に多くは誤字あり、證とするに足らず。世俗文盲なる人、眞書を早く學べば、手腕すくむと云ふは誤なり。是書法を知らざる人の言ふ事なり。初學より眞書を能く書習ふべし。初學の時、眞草ともに小字のみ書きて、大字を書かざれば、手すくみてはたらかず。故に初て手習ふには、眞草ともに大に書くべし。其後には、次第に細字をも書習ふべし。手のすくむとはたらくとは、習字の大小にあり。眞草によらず。

説文一説文
解字をい
ふ、三十卷、
漢の許慎の
撰にして六
書により文
字の起源意
義を説明せ
るもの也
かゝはりた
る一方に
拘泥せる義

順和名抄一
源順の著は

せる和名抄
の義、和名
抄は倭名類
聚抄の略稱
也、二十卷
あり、天地
歳時鬼神等
四十部二百
六十八門に
分ちて名を
記し文字の
出處を記せ
るもの也

つけ字一送
假名をいふ

一文字をかき、書を寫すには、筆畫をよく辨へ知りて、誤なかるべし。世俗の字を書くは、字畫に甚誤多し。心を用ひて筆畫を知るべし。字畫を知るには説文を宗とし、玉篇の首卷、字彙の末卷、及び續字彙の内、字體辨微、黄元立が字考を以て誤を辨すべし。字學にも亦心を用ふべし。

一書狀を書くには、本邦の書札のならひあり。必書禮を學んで、其法に従ふべし。書禮を學びざれば、文字を知る人も、誤ること多し。

一唐流には、筆法のならひ猶もこれ有り。予嘗て諸書の内を考へ、からの筆法の諸説を集めて、一書を著せり。心畫軌範と名づく、一册あり。和流には筆法の傳授とて、字ごとに色々むつかしきならひあり。唐流には、すべての筆法のならひはあれど、和流の如く、かゝはりたる法はこれなし。

一世間通用の文字を知るべし。書跡よくしても、文字を知らざれば用をなさず。天地人物、人事、制度、器財、本朝故實、鳥獸、蟲魚、草木等の名、およそ世間通用の文字を知るべし。世俗は、通用の文字を知るに、順和名抄、節用集、下學集などを用ふ。順和名抄は用ふべきこと多し、また誤多し、功過相半なり。節用集、下學集は誤多し、

用ふべからず。世俗是等の書を用ふるゆゑ誤多し。近年印行せし訓蒙圖彙、和爾雅、倭字通例書などを擇び用ふべし。今世俗の通用する漢名和名、誤甚多し。能く擇んで書くべし。

一國字を書くに、假名遣とてにはを知るべし。かなづかひとは、音を書くに開合あり。開合とは、字を唱ふるに、口のひらくと合ふとなり。和音五十字の内、あかさたな、はまやらわは、ひらく音なり。江肴豪陽唐庚清青の韻の字は、皆開くなり。おこそとの、ほもよろをは、合ふ音なり。東冬蕭霄蒸登尤侯幽の韻の字は、皆合へるなり。又和訓の詞の字のかなづかひは、いる、おを、えゑの三音は、各二字つつ同音なれど、字により所によりて、いの字を用ひるの字を用ふるかはりあり。おをとえゑも亦同じ。又はひふへほと書きて、わるうゑをとよむは、和訓の詞の字、中にあり下にある時の書きやう読みやうなり。是も和音五十字にて通ずる理あり。是皆かなづかひの習ひ也。五十音に能く通ずれば、其相通を知るなり。又てにはとは漢字にも和語にもあり。漢字和語の本訓の外、つけ字をてにはと云ふ。てにはと云ふは、本訓の外つけ字にて、の字、にの字、はの字多き故に名づく。又てにをはとも云ふは、をの字も多ければな



り。和字四十八字をいろはと云ふがごとし。學んで時に之を習ふとよめば、ての字にの字、をの字は、皆てには也。やまと歌は、人の心を種としてと讀めば、はの字、をの字、ての字、皆てには也。又和語のてには、上下相對するならひあり。ぞける。こそけれ。にけり。てけれ。是上をぞと云へば、下はけると云ひ、花ぞ散りけると云ふべし。花ぞちりけりとは云ふべからず。上にてこそと云へば、下はけれと云ふべし。上にてこそと云ひて、下にてけりと云ふべからず。にけり。てけれも、是を以て知るべし。又はし、ぞきと云ふは、上をはいへば、下はしと云ひ、上をぞと云へば、下はきといふ。たとへば、鐘の音はうし、鐘の音ぞうき、此類を云ふ。是皆てにはの習ひなり。かなづかひ開合と、てにはを知らで、和文和歌を書けば、ひが事多くして笑ふべし。

